



第6回シニアの精神科症例検討会

連続する行動障害に苦慮した前頭側頭型認知症女性の一例

平成29年5月30日(火)19:00から、ときわ病院2階研修室にて第6回シニアの精神科症例検討会が開催されました。今回も医師、看護師、保健士、作業療法士、ケアマネージャー、ソーシャルワーカーなど多職種の方が参加されました。



今回は「連続出現する行動障害に苦慮した前頭側頭型認知症女性の一例」について、医療・介護・福祉それぞれの立場からいつのタイミングで、どのような対応をするかについてグループワークしていただきました。

物忘れの時点で受診できなかったか、夫のケアマネが地域包括に相談できなかったか、クリニック受診の時点で認知症を疑う事は困難か、不可解な言動が見られたところに福祉が介入するチャンスがあったのではないかなど、それぞれの立場から様々な意見が出されました。



その後、グループワークで出された意見をホワイトボードに書き込んだのちに、説明を加えるという形式で発表していただきました。皆さん他のグループの意見に熱心に見入っていました。



今回の症例は、最初に物忘れなどが見られたのが「50代と比較的若かった」ことや、「一般的な行動から逸脱している」「常識はずれな行動が目立つ」ことから、精神疾患との区別が難しい症例でした。参加された医師からも症状の出始めの頃はうっと区別するのは難しいとの意見が出されていました。

また、家族がもう少し早くSOSを出せなかったか、夫のケアマネと家族が話し合う機会はなかったのか、ケアマネが精神科受診を勧めても拒否されるケースが多いなどの問題点が挙げられました。家族の関係や、家族と地域の関係が希薄になっている状況で、地域としてどうかかわっていくかが今後の課題として浮き彫りになりました。

まとめとして、当院中本医師より今回の症例をもとに、もの事を考えたり、判断したり、理性的な行動をとるために計画を立てたり、計画を実行したりといったOUTPUT機能が障害される前頭側頭型認知症の特徴について解説がありました。脳の働きや、萎縮部位の違いからくる特徴的な症状に関する説明に、参加された皆さんは興味深く耳を傾けていました。

